

[長野県] 信濃町立信濃小中学校（義務教育学校）

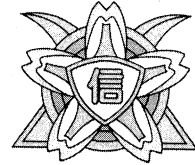
1. 学校（区）概要

教育目標：【自主】自ら求めて学ぶ児童生徒 【友愛】命と仲間を大切にする児童生徒
【克己】最後までやり抜く児童生徒 【躍進】自分自身をみつめ豊かに生きる児童生徒

所在地：長野県上水内郡信濃町大字古間 4 9 0

施設形態：施設一体型

児童生徒数（R3.5.1時点）



学年	小学校								中学校					小・中 計
	1	2	3	4	5	6	特支	計	7	8	9	特支	計	
児童生徒数	43	37	40	54	43	56	12	285	53	54	67	15	189	474
学級数	2	2	2	2	2	2	2	14	2	2	3	3	10	24

2. 導入経緯

【検討開始のきっかけ】

児童生徒数の減少と施設の老朽化

【具体的な経緯】

- ・平成 1 6 年度 信濃町立小学校適正配置検討委員会設置
- ・平成 1 9 年度 教育環境検討委員会設置
- ・平成 2 4 年度 5つの小学校と1つの中学校を統廃合し信濃小中学校開校
- ・平成 2 8 年度 義務教育学校に移行

3. 小中一貫教育の取組概要

ねらい

基本理念「信濃町に誇りをもち、次代を担う人材の育成」～学びに向かう力と温かな人間性の涵養～

- ・初等部では豊かな自然の中で、体験活動を通して、基本的な学習習慣や人間関係力を培う。
- ・高等部前期では教科担任制で専門的な学びを通して、教科の本質に触れながら主体的な追求力を培う。
- ・高等部後期では自らの生き方を見つめ、夢の実現に向けて進路を切り拓く力を培う。

教職員体制

校長：1名 副校長：1名 教頭：1名
教職員：66名

教育課程特例・区切り・区切りを意識させる学校行事等

教育課程の特例：なし

区切り：4－5制

学校行事等：初等部修了式（4学年）、前期課程修了式（6学年）、立志式（8学年）、秋桜祭

教科担任制・教員の相互乗り入れ

教科担任制：第5学年から、算数、理科、音楽、図工、家庭科、体育において実施
令和3年度から第3学年からの音楽、図工、体育においても実施

児童生徒の異学年交流の工夫

運動会、文化祭の1～9年生合同実施

市町村教育委員会等による支援

小中一貫教育 町費講師の配置、学習支援員、リソース等指導員の配置

その他

学校運営協議会の設置

しなの学校応援団（地域住民の方が特技などで外部講師となり学校に協力）

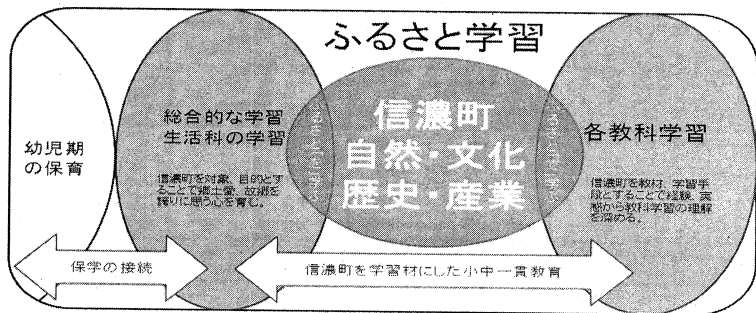
テーマ：小中一貫した教育課程「ふるさと学習」

ふるさと学習のねらいと具体的な取り組み

なぜ小中一貫の教育課程で「ふるさと学習」を位置づけたか

信濃小中学校は、5つの小学校と1つの中学校の統廃合により、町唯一の学校として新たに開校した。小中一貫9年間で取り組む信濃町を学習材とした「ふるさと学習」を通して、信濃町の児童生徒としてのアイデンティティを育み、生まれ育った故郷への感謝と誇りを持ち、主体的に自らの地域を考えることができる、次代を担う人材を育成する。

また、講師となる地域住民と積極的に関わりを持ち、地域に開かれた学校づくりを進めることで、地域との協働関係を強化し、地域で子どもを育み、支援する体制をつくっている。



学校教育目標の実現

信濃町に誇りを持ち、次代を担う人材の育成

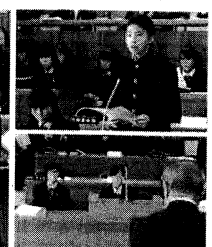
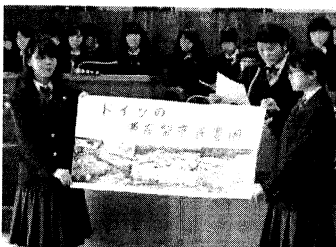
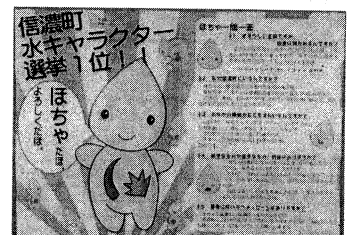
～学びに向かう力と温かな人間性の涵養～

具体的に「ふるさと学習」で何をしているか

江戸時代に活躍した俳人小林一茶の生誕地であることから、幼児期から「一茶かるた」に親しみ、この具体的体験を、学校教育と結び付けるために、信濃小中学校入学後は、一茶記念館の学芸員の協力を得ながら、遊びの中で親しんできた一茶の俳句を基礎にして、2年生と7年生の国語で俳句について学んでいる。

初等部（1～4年）では、生活科、総合的な学習の時間の中で、地域住民の協力を得ながら地域巡りや野尻湖クリーンラリー、米作りなどをおこない、自分の周りに学ぶべきものがたくさんあることを認識させることで、身の回りへの知的好奇心を高めている。

高等部（5～9年）では、自ら問いを設定し、試行錯誤を繰り返しながら、友だちや地域の人々と対話し、一人一人が自ら答えを導いていく課題解決学習を特に大切にしている。例として、令和3年度の7年生は、信濃町のおいしい水に興味をもち、町の水道係を訪ねた。そこで冬期にかなりの漏水があることを知り、町の水道係と連携しながら、水道のキャラクターをつくって住民に告知することで、町の漏水問題を解決しようと学習を進めた。9年生になるとふるさと学習のまとめとして、研究成果を町へ提言するなど、学校内にとどまらない、広がりや深みのある学習をおこなっている。

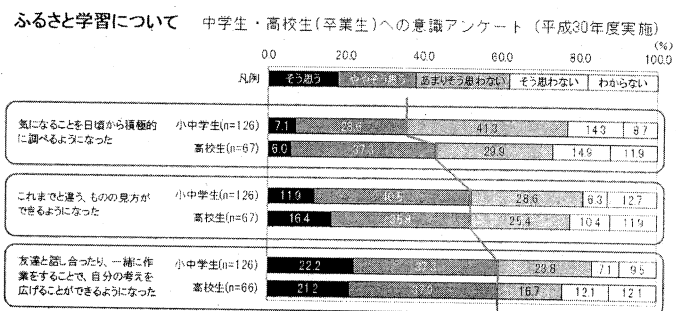


これまでの成果と課題、今後の取組

信濃町の恵まれた自然や歴史文化を題材化し、小中一貫教育を通じた新たな学びを創造できている。

ふるさと学習を通して、信濃町を好きな子どもが増えている。また、知的好奇心の高まりや学び合いにより自分の考えの広がりが見られる。過去の実践をアーカイブ化し、また総合的な学習の時間（ふるさと学習）の目標（願う姿）について、教職員間で共通理解を図り、学校全体の横断的・系統的な取り組みとして深化させたい。

講師となる地域の方（しなの学校応援団）と校内コーディネーターを中心とした地域連携の仕組みを構築する。校外学習が計画的に実施できるよう、日課と学校行事などの見直しを図る。



校長コラム つくば市立みどりの学園義務教育学校 校長 毛利 靖 「校長1人の場合の学校経営」（義務教育学校）

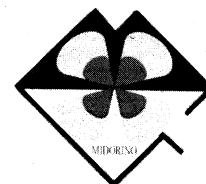
1. 学校（区）概要

教育目標：世界のあしたが見える学校 学びたくなる学校

所在地：茨城県つくば市みどりの中央12-1

施設形態：施設一体型

児童生徒数（R3.5.1時点）



学年	小学校								中学校					小・中 計
	1	2	3	4	5	6	特支	計	7	8	9	特支	計	
児童生徒数	303	271	246	208	129	137	62	1356	97	82	54	6	239	1595
学級数	9	8	7	6	4	4	10	48	3	3	2	2	10	58

2. 導入経緯

【検討開始のきっかけ】

小学校高学年の指導困難化や中1ギャップなど小中の教育課程の枠組みが児童生徒の実態に合わなくなってきたため

【具体的な経緯】

・平成24年度 市内全小中学校で小中一貫教育を推進

・平成30年度 みどりの学園義務教育学校、学園の森義務教育学校、秀峰筑波義務教育学校 開校

3. 小中一貫教育の取組概要

ねらい

9年間の教育を通して、身に付けたい力・目指す児童生徒像を共有化し、系統的な教育を行う。

義務教育学校の特長を活かし、家庭の協力、幼保、地域、大学研究機関との連携を図りながら推進する。

9年間を見通した弾力的・効果的な教育課程を編成・実施する。

教職員体制

校長：1名、副校長：1名、教頭：2名、教務主任：2名配置、校務は小中で分けず業務内容で分担

教職員：義務教育学校であるため兼務では無く、一つの学校として発令。小中授業が持てる。

教育課程特例・区切り・区切りを意識させる学校行事等

教育課程の特例：つくばスタイル科を創設（総合、生活科、特活等を使って21世紀型スキルを育成）

区切り：4-3-2

学校行事等：全学年での問題解決学習の成果としての大型提示装置を使ったプレゼンテーション

全職員全学級による9年間プログラミング学習（つくばスタイル科及び各教科）、スクラッチを発達段階に応じて系統的に活用することで、日常的な活用に進展。プログラミングをSDGsやSTEAM教育に応用。

教科担任制・教員の相互乗り入れ

教科担任制：第5学年から、全教科において実施

教員の相互乗り入れ：中学校教員が小学校の音楽、美術、体育に乗り入れ、小学校教員が中学校の社会、技術、家庭に乗り入れ

児童生徒の異学年交流の工夫

後期課程生徒が、1年生にPC支援、委員会活動（5～9年）、7年が6年に職場体験プレゼン、合唱祭・体育祭・入学式・卒業式など学校行事は1～9年生全校で実施

市町村教育委員会等による支援

つくばスタイル科を実施するための事業費を各学園に手当てしている

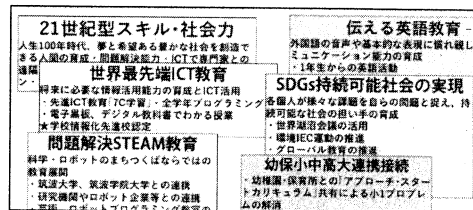
その他

小学校（前期）教員も部活動指導、学校運営協議会、PTA組織未設置で支援組織が協力

テーマ：～ 9年間のグランドデザイン、教育課程の特例を活用した特色ある学び（プログラミング学習）、全職員で行う「魅力ある学校環境」での「ワクワクする授業」～

2040年代Society5.0時代にリーダーとして活躍するための力の育成

本校は、児童生徒増加にともない平成30年4月につくば市の公立義務教育学校として開校した。開校時、校長として最初におこなったことは「グランドデザイン」の作成である。「グランドデザイン」は、学校運営上極めて大切であり、校長に与えられた重要な権限である。作成に当たって考えたことは、新学習指導要領など国が打ち出す施策の多くが、Society 5.0時代を見据えていることであり、つくば市の小中一貫教育推進のシンボルである「つくばスタイル科」は、教育課程の特例で作った教科であり、21世紀型スキルの育成を目指していることである。これらのことから、学校教育目標を「世界のあじが見える学校」とし、「21世紀型スキル」「世界最先端ICT教育」「問題解決STEAM学習」「SDGs」「幼保小中高大連携」などを柱としたグランドデザインを作成した。作成してわかったことは、これらのことは、すべてICTが無くては実現ができないということである。ICT教育は言うまでも無く、問題解決学習において、児童生徒が課題を見つけ、解決していくためには、教員が用意した教材だけではなく、自らICTを使って、調べたり協働したりしなければならない。そうしたことを踏まえて、校内のICT教育環境整備を進め、教職員に対しても積極的なICT活用を推進した。



【グランドデザインの一部】

小中の垣根を超えた全職員による取組と成果

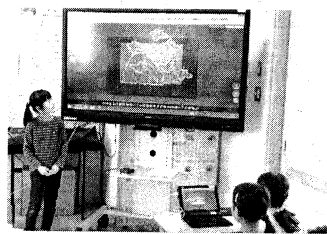
つくば市では、プログラミング教育や英語教育は発達段階に応じて、9年間で習得することを目指している。そこで、少しずつでも良いので**全学年全職員**で行うことにした。とは言っても、プログラミングを知っている教員は、小学校担任20名中2名しかいなかった。そのため、その2人の教員を低学年ブロックの3年と高学年ブロック5年に配属し、各学年の教員が相談できるようにした。さらに、各学年に比較的ICTスキルのある教員をICT部員として配置した。各学年でプログラミング学習を実践する際は、最初にICT部員の教員が実践を行い、他の担任は、授業を見学したり、資料をもらったり、相談したりしながら、次々と他の学級で実践が行われた。資料をもらった教員は、自分が使いやすいように改良していったので、最後の学級が実践する頃には、ICTが得意な教員よりも上手に授業ができるようになった。また、プログラミングに精通した中学技術担当の教員が、放課後、前期の教員にプログラミングの使い方をアドバイスする姿が見られた。小中の垣根を超え全職員が一体となって取り組むことにより、教職員には高い同僚性が生まれ、かつ、各学年、少し実践時期がずれたが、開校1年目で小学校1～6年生まで全学年全学級で担任がプログラミング学習を行うことができた。

SDGsやSTEAM学習へと夢が広がるプログラミング学習

開校1年目のプログラミング学習は、市のプログラミングカリキュラムどおりに進めてきたが、2年目以降は、教員がその意味を理解し、オリジナルなプログラミング学習へと発展させてきている。

教員の学び

教員の学びとして例えば、開校1年目に1年担任が、2年目は3年生の担任となり、1年国語「スイミー」の単元で行ったプログラミングの学習を生かして3年国語「短歌」でプログラミングを活用した。この教員は、以前プログラミングの経験は無かったが、教科の中でのプログラミングの有効活用を**主体的に考えて実践**し、同僚にプログラミングを広める結果となった。また、後期課程教員が児童のスキルの高さを知り、以前より高度なプログラミングにカリキュラムを変更するなど**プログラミング学習はどんどん広がった**。



【3年国語プログラミング学習】

学習への展開

学習への展開事例として、1年生では、多目的ホールに大型提示装置を5台集めて、コロナ禍で水族館遠足に行けない児童のために、児童が描いた魚をプログラミングで泳がせたり、6年生では、SDGs・STEAM学習「プログラミングで地球を救おうプロジェクト」として、児童1人1人がさまざまなプログラミング教材を使い、問題解決しようとしている。さらに、6年生までの学習



【9年生生態系シミュレーション】

を後期のつくばスタイル科に生かし、「貧困や環境に配慮したAI農業（マイクロビットを使って環境制御等）」「マインクラフトを使った住みよい街づくり」「生態系シミュレーション」などに発展させる活動となっていた。こうした学習を展開することで「授業が楽しい」「勉強ができるようになった」と90%以上の学園生が答えている。



【1年水族館プログラミング】

また、新型コロナウイルス感染症により令和2年4月から約2ヶ月間にわたって休校となり、多くの学校がオンライン学習で困っており、教科書の学習を進めるのがやっとであったらう中、本校では、社会では都道府県クイズを作ってみようとか、国語では物語の情景をプログラミングで表現してみようなど、プログラミングを使った学習課題を出していた。そのおかげで、休校時でも、一斉学習やプリント学習だけでなく、**楽しくワクワクする学習**とすることができた。

「全職員でプログラミングやオンライン学習がなぜできるのか」と、よく聞かれる。本校では、研究指定を受けているわけではなく、職員はプログラミングの達人ではなく、たくさん研修をおこなっている訳でもない。

強いて言えば、全学年全職員「**なんでもやってみよう**」「**みんなに聞いてみよう**」という雰囲気がある。がんばってやっていることは、失敗しても批判しない、実現できるように支援する。保護者にも理解を求め、教職員みんなで**「魅力ある学校環境」での「ワクワクする授業」**を目指している。だから、プログラミングの授業をしているときの先生は、いつも楽しそうである。新任・ベテラン・小中の垣根を超えた**「全職員」**で日常的に相談して教材研究を進め、授業改善に繋がるように自らも楽しく取り組んでいる。児童が「**学びたくなる学校**」は職員も「**学びたくなる学校**」なのである。

[宮崎県] 新富町立新田^{にゅうた}小中学校（併設型）

新富町立新田小学校
新富町立新田中学校

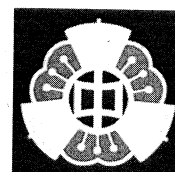
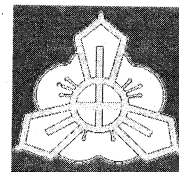
1. 学校（区）概要

教育目標：夢や希望をもち 心豊かに とともに伸びゆく 新田の子どもの育成

所在地：宮崎県児湯郡新富町大字新田7717番地1

施設形態：施設一体型

児童生徒数（R3.5.1時点）



	小学校								中学校					小・中 計
学年	1	2	3	4	5	6	特支	計	7	8	9	特支	計	
児童生徒数	35	32	39	41	40	36	14	236	27	38	29	5	99	335
学級数	1	1	2	2	1	1	3	11	1	1	1	1	4	15

2. 導入経緯

【検討開始のきっかけ】

将来的な児童生徒数の減少を見込み、町が小中一貫教育を核とした教育の推進にシフトしたため

【具体的な経緯】

- ・平成23年度 小中一貫校に関する保護者説明会
- ・平成24年度「田園の里 新田学園」（新富町立新田小中学校）開校

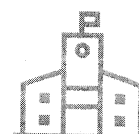
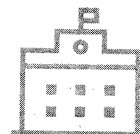
3. 小中一貫教育の取組概要

ねらい

新富町の素晴らしい伝統・文化・教育資源を生かして、自ら学び、自ら考え、正しく判断し行動する力など「社会を生き抜く力」や人としての「確かな力」を育み、社会の変化に主体的に対応し、夢や希望を抱いて、郷土を愛し、社会に貢献する気概をもった子どもの育成を目指す。

施設活用（施設隣接・施設分離型の場合）

施設一体型のため、距離はなし



教職員体制

校長：1名配置
兼務発令の状況：全教職員

小学部校舎	中学部校舎
第1学年～第6学年	第7学年～第9学年
児童236人	生徒99人
教職員19人	教職員15人

教育課程特例・区切り・区切りを意識させる学校行事等

教育課程の特例：特例はない

区切り：4-3-2制（Aステージ：1～4年 Bステージ：5～7年 Cステージ：8～9年）

学校行事等：小中合同入学式、小中合同体育大会など

教科担任制・教員の相互乗り入れ

教科担任制：第5学年から、音楽、家庭において実施

教員の相互乗り入れ：中学校教員が小学校の理科、音楽、体育、外国語活動、外国語に乗り入れ

児童生徒の異学年交流の工夫

日常的な縦割り清掃、児童生徒会活動、中学部生徒による小学部児童への読み聞かせ、いじめ防止に取り組む小中合同の組織「風の会」、小学部から中学部3年生への受験応援メッセージなど

市町村教育委員会等による支援

ICT機器の環境設定及び導入段階の研修等

その他

小中一本化されたPTA組織による活動

テーマ：小中一貫教育の利点をより享受するための「校務の情報化」

本校は、隣接する小学校と中学校でつくられた施設一体型の小中一貫校である。開校当時は、小・中学校それぞれの良さを生かしながら9年間を通じて児童生徒を育成することについて意識改革を行い、小・中学校それぞれの体制が一つに確立された。小中一貫校になり小中の校時程や行事等を揃え一つの学校としての体制を整えたものの、職員間の情報共有の場を設定することが難しく、子供たちの学習状況や生活の様子を丁寧に把握しにくいという課題があった。また、その課題を解決するために業務負担がより大きくなってしまったという課題もあった。

そこで、校務の情報化を進め、以下に記載したような取組を開始した。

「乗り入れ授業」の実施を通じたきめ細かい学習指導や、9年間を通じて児童生徒の成長と向き合えるといった小中一貫ならではのメリットを、校務の情報化を通じてより高められている。さらに、教員の業務負担を軽減できることから、喫緊の課題である「働き方改革」にも対応できている。

校務支援システムを活用した取組

諸表簿機能の活用

諸表簿には、学籍や出席状況、成績等のように小学部・中学部別、学級別に整理したいものと連絡先や兄弟関係等のように小中を一括りとして整理したいものがある。校務支援システムの小中のデータのやり取りや行き来が自由に設定できる利点を生かして、下記の表簿について業務の効率化を図っている。

小中のデータを一括管理することで、乗り入れ授業等で小・中の区別なく必要な情報を得られるため、9年間を通じて児童生徒の状況が把握でき、児童生徒の成長とじっくり向き合うことが可能になっている。

また、年度替わりの各担任の事務作業等を軽減したりすることができると同時に、諸表簿のデジタルデータによる管理が可能になり、教員の業務負担の軽減につながっている。

- ・学籍、名簿等の管理（連絡先・兄弟姉妹関係等含）
- ・出席状況（健康観察含）
- ・成績処理（各種テスト・通知表・指導要録含）
- ・学校日誌・保健日誌
- ・出退勤時刻記録

連絡確認機能の活用

小学部は45分授業、中学部は50分授業であり、校時程に時間のズレが生じたり、別棟で行き来に時間がかかったりするため、休み時間等に小中の職員の確認や打合せが行いにくい。それを解消する手段として、校務支援システムの連絡掲示板機能や個人連絡機能を活用し、効率化を図っている。

これらの機能には、確認連絡の機能に加え、意思確認ができる機能もあり、5択までの確認が可能であるため、この機能を使えば、会を開かなくても意思確認をしながら業務を推進することができる。これらの機能を活用することで、連絡確認や会議の削減が可能になり、小中の関係職員がつながり合いながら、組織を機能させることにつながっている。

- ・連絡掲示板機能の活用
- ・個人連絡機能の活用
- ・配付文書の電子化



共有サーバーを活用した取組

共有サーバー内に学部、校務分掌別のフォルダを作り、いつでも、誰でも資料を保管・活用することができるようにしている。フォルダは次年度分まで準備されており、本年度完了した活動については、反省を踏まえて書き換えた文書を次年度フォルダに残すところまでを年度内に実施する業務としている。職員会ではペーパーレス化し、サーバーに保管されたフォルダ内の文書をもとに会議が進められる。

次年度の提案文書については、大きな見直しがない限りそのまま提案できるため、業務の効率化につながるとともにペーパーレス化で印刷時間の削減やコスト削減にもつながっている。

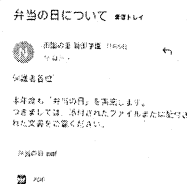
- ・文書や写真等の一括管理

学校配信メールを活用した取組

これまで、学校からの文書はすべて紙媒体で配付していたが、令和3年度途中から、文書をPDFファイルでメールに添付して配付するようにした。これまで同様、紙媒体での配付を希望する家庭には紙での文書を配付し対応している。また、学校評価等のアンケートについてもWeb回答のシステムを導入した。

ペーパーレス化で印刷時間の削減コスト削減につながっていると同時に、文書配付時間の削減やアンケート配付・回収・集計等の業務の効率化を図ることにつながっている。

- ・学校文書のメール配信
- ・アンケート配付・回収・集計の電子化



これまでの成果と課題、今後の取組

成果

- ・諸表簿や文書を一括管理したことで、小・中の区別なく、必要な職員が自由に情報にアクセスできるとともに、担任が変わった後も情報を引き継ぎ、書き換えながら活用することができるようになり、業務の効率化を図ることができた。
- ・校務を情報化したことで、業務が効率化され子どもと向き合う時間を生み出すことができたとともに、時間とコスト削減にもつながり、業務改革を推進することができた。さらに、9年間を通じた教育ができるという小中一貫ならではのメリットをより享受できるようになった。

課題

- ・校務の情報化が職員間のコミュニケーションの減少につながらないよう、日常的な対話や職員会等での意思疎通をより深めていく必要がある。

今後の取組

- ・校務を情報化することで対応できる業務内容と情報化することが難しい業務内容を精選することで、必要な時間を必要な業務に充てることができるよう、選択と集中により更に効率的に業務を推進していく。

[東京都] 足立区立新田学園（併設型）

足立区立新田小学校
足立区立新田中学校

1. 学校（区）概要

教育目標：自ら学ぶ人、共に生きる人、健やかでたくましい人

所在地：足立区新田3-34-2

施設形態：施設分離型

児童生徒数（R3.9.1時点）



	小学校								中学校					小・中計
学年	1	2	3	4	5	6	特支	計	7	8	9	特支	計	
児童生徒数	180	184	190	227	228	216	10	1235	200	180	181	8	569	1804
学級数	6	6	5	6	6	6	2	37	6	5	5	1	17	54

2. 導入経緯

平成17年 構造改革特別区域計画「小中一貫教育による人間力育成特区」の認定

平成17年 学校部会・まちづくり部会などで地域との対話スタート

平成18年 基本構想作成

平成22年 足立区初の小中一貫教育校「新田学園」として開校

3. 小中一貫教育の取組概要

ねらい

足立区の小中一貫教育は「確かな学力の向上」と「心の教育の充実」によって、自立した一人の人間として、力強く生きていくための「人間力の育成」を目指して、展開されることとなった。9年間一貫したカリキュラムによって小中の連続性をもたせるとともに、小中の教員間の連携による教育効果の向上、教育方法や内容を変えていくまとまりを4-3-2制とすることなどを通じて、個に応じた教育を実現する。

施設活用（施設隣接・施設分離型の場合）

平成25年に児童生徒数増加により第二校舎開設

校長は、第1校舎と第2校舎を行き来

第1校舎と第2校舎の距離は240m（徒歩3分）



第1校舎	第2校舎
5年生～9年生	1年生～4年生
生徒1013名	児童791名
教職員93人	教職員88人

教職員体制

管理職：校長1名、副校長4名

教職員：兼務発令は、全教職員に行われている。

教育課程特例・区切り・区切りを意識させる学校行事等

教育課程特例：なし

区切り：子どもの発達に即して9年間で3期4-3-2制に区分

I期（4年）…「学びの基本姿勢」を目指し、基礎基本の定着、生活習慣・学習習慣の定着を図る

II期（3年）…「意欲的な学習姿勢」を目指し、基礎基本の徹底、思春期の課題に対応する

III期（2年）…「主体的な学習姿勢」を目指し、自主・自立の態度の育成を図る

I期終了の区切りとして4年生はリーダー活動（児童会活動）を設定し、II期のリーダー活動につなげる

運営概要

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年
学年区分	Ⅰ期				Ⅱ期			Ⅲ期	
校 時	45分授業						50分授業		
主な行事	全 体 行 事								
制 服	校 服						制 服		
クラブ活動	課内クラブ								
	部活動				部活動				
教科担任	学級担任						教科担任		
児童・生徒会活動	リーダー活動				委員会活動				
P T A	学園PTA								
	小学校PTA						中学校PTA		

教科担任制・教員の相互乗り入れ指導

厳密な教科担任制ではないが、小学校高学年に定期考査を導入することで、一部教科担任的な状態を実現

市町村教育委員会等による支援

足立スタンダード（※）に基づく授業実現のために専門員

（教員OB）が巡回し、教員に指導・助言

※足立スタンダードとは、「授業におけるめあて」を明確にし、一人ひとりがしっかりと考え、子ども同士で学び合う問題解決型の授業を実現することで、学力向上を図る取組み

テーマ：小中一貫で実現する「確かな学力の向上」

【目指すこと】 知識・技能のみならず、思考力・判断力・表現力を鍛え、
学びに向かう力・人間性等を育む義務教育を行うこと

(そのためにやっている主たる具体的な実践)

小学校高学年からの教科コンテストの実施

- ・ 問題は、定期考査との役割分担で知識・技能を問うもの。
 - ・ 実施の頻度は、年間 10 回（うち小学部 8 回）。
 - ・ 国語は漢字、算数は四則計算、理科・社会はeライブラリーから復習を中心に問題を出題。
 - ・ 合格しない場合には放課後補充教室（※）で補習を受ける。
- ※放課後補充教室とは、教科コンテストで基準点に満たない児童・生徒や、自主学習（家庭学習）ノートの未提出児童・生徒を対象に週 2～3 回取り組む補充学習。

小学校高学年における定期考査の実施

- ・ 問題は、教科コンテストとの役割分担で、思考力・判断力・表現力を問うもの。
- ・ 実施の頻度は、前期中間・期末、後期中間・期末の年 4 回である。例えば、外国語ではライティングの他中学部同様リスニングも含めた問題を出題。
- ・ 指導と評価の一体は、問題を作成してみても初めて実現できるという理念のもと、小学校の教員複数がチームで定期考査の問題の作成を行う。

(実践から特に得られたこと)

児童・生徒の「個」に応じた指導による 学習機会の提供

- ・ 早期につまづきを発見し、放課後補充教室で異なる学力層の子供に対応した個別指導を実施することにより、課題を解消することができた。
- ・ 合格基準点を超えることで、「できるようになった」「わかるようになった」という気持ちや、自己肯定感につなげることができた。

「指導」と「評価」一体とすることによる 教員一人一人の指導力の向上

- ・ 小学校には定期考査の問題作成のノウハウがなかったため、中学校の教員に学び、その過程で教科理解が深まった。
- ・ 問題作成は、どのように指導を行うかを振り返ることでもあり、問題作成をすることにより、学年で統一した指導内容と、教員一人一人の指導力の向上、授業改善にもつながった。

児童生徒に生じた小中一貫教育の「良さ」

認知能力、非認知能力両面から基礎的な素養を身に付けることができる

- ✓ 2つの具体的な実践をきっかけに、小学校教員の全人教育ができる良さ、中学校教員の教科指導ができる良さを双方に取り入れ、互いに補い合い、小学校高学年で両方の良さを活かした移行期間を設けることにより、義務教育 9 年間で小中両方の教員で全人教育を行いながら、基礎学力の定着を図ることができる。例えば、新田学園で 9 年間育った現 9 年生は、今年度の全国学力調査（数学）において上位の成績を収める結果となったことも、その成果ととらえている。
- ✓ 特に、非認知能力という点では、小学校高学年が中学生の姿を見て学べる、ロールモデルが近くにいる、という点が大きくプラスに働いている。例えば、中学校 3 年生が体育祭などで発揮する、努力したからこそ得られた強さ、速さなどは、小学校の児童にとっては、「憧れ」「こうなりたい」と思うきっかけになる。教員がどんなに教室で情報として伝達するよりも心に響く、内発的な動機となって、「学び」につながっている。

これまでの成果と課題、今後の取組み

小中一貫教育校での学びの深まりは、学力の向上という点で効果的に働いたが、さらなる展開のために、教職員の共通行動、また、指導力向上が必要不可欠である。

小中一貫教育校のよさを児童・生徒も体感できるよう、「体育祭・運動会」「合唱コンクール・学習発表会」などの学校行事を見直すなど、既成概念から脱却して小中一貫教育校のよさを前面に打ち出せるような改革を進める。

義務教育学校「はびきの埴生学園」の概要

【教育目標】

たくましく生きる力を育み

未来へつながる道を切り拓く子どもを育成する

めざす子ども像

学ぶ力

自ら学び、自分の夢・進路を
実現する力を持つ。

豊かな心

他者を思いやり、
正しい人権意識を持って行動できる。

健やかな身体

自ら心身を鍛え、
困難を乗り越える強い心と体を持つ。



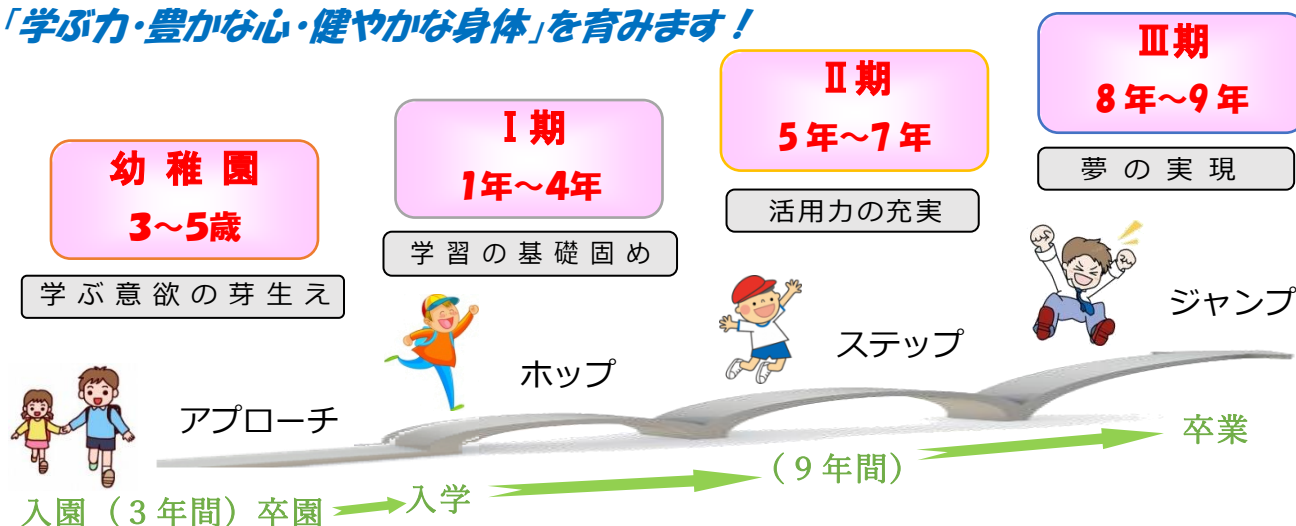
めざす学園像

- ☞ 確かな学力が育つ学園・・・目的意識を持って、意欲的に学習する子どもが育つ
- ☞ 安心して通える学園・・・一人ひとりが大切にされ、信頼できる仲間ができる
- ☞ 楽しく通える学園・・・学ぶ喜び、努力が報われる楽しみ、たくましい身体が育つ
- ☞ 信頼される学園・・・困ったときにはまず学校へ、不安をともに乗り越える

カリキュラム

幼稚園から9年の卒業まで、12年間の一貫教育で

「学ぶ力・豊かな心・健やかな身体」を育みます！



義務教育学校とは……



【義務教育学校とは どんな学校？】



今までの小学校 6 年間の教育課程【前期】と、中学校 3 年間の教育課程【後期】を一体化し、9 年間でひとつの教育課程として義務教育（一貫教育）を行う学校です。

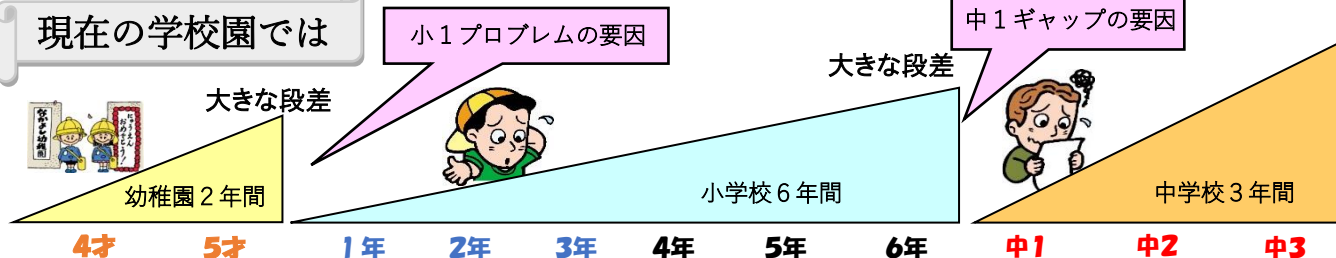
◎前期（小学校に相当）と後期（中学校に相当）の教職員が緊密に連携し、これまでの小学校教育と中学校教育の段差【中 1 ギャップ】の大きな課題を克服し、効果的な教育を行います。

◎学校組織はひとつで、一人の校長の下、前期【小学校相当】と後期【中学校相当】を担当する教職員が協力して一貫した方針で学習指導を進めます。

◎教育課程は 9 年間で、もっとも適切な時期に、もっとも適切な段差を準備し、子どもたちの成長を促す教育課程を準備しています。（学年のまとまりは、4－3－2 が基本）

★それに加えて「はびきの殖生学園」では、義務教育就学前からの成長過程で生じる種々の課題を円滑に克服するため、幼稚園の 3 年間で義務教育 9 年間の **12 年間**を見通したカリキュラムで、子どもたちの健やかな成長をはかります。

現在の学校園では

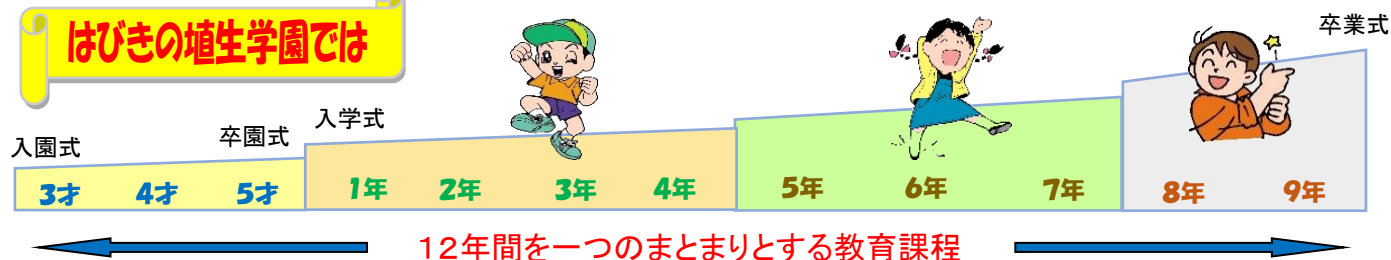


幼から小へ、小から中への急激な学習環境の変化と指導法の違いが、小1 プロブレム、中1 ギャップなどの要因に！

これらの課題を克服するために



はびきの殖生学園では

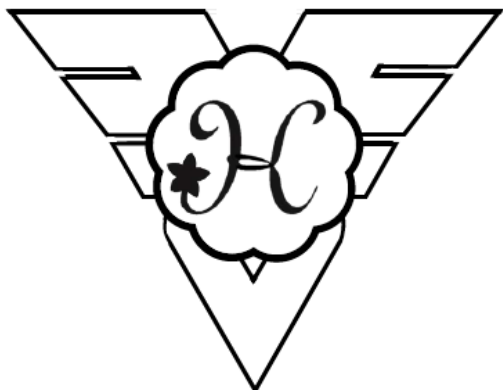


入学から卒業まで、滑らかに高まる学習内容と成長の節目の行事などで、学ぶ楽しさを感じられる学校生活に！

幼稚園に加え 1 年から 9 年までの義務教育 9 年間で、1 つの教育課程とする新しい形の学校です

学園の体制

校章



羽曳野の「羽」のイメージを上部に大きく描き、下部に羽曳野中の校章の構成要素であった羽曳野市章を配置し、大きく堂々とした形にして、「志」を強く持って、未来に羽ばたいてほしいという願いを込めています。

中心の「H」の文字は、羽曳野中、埴生小の頭文字である「H」を、小中の結びつきをあらわしたデザインとし、埴生小の校章のモチーフであった桃の花をあしらったものであり、新制服のエンブレムにも使用されています。

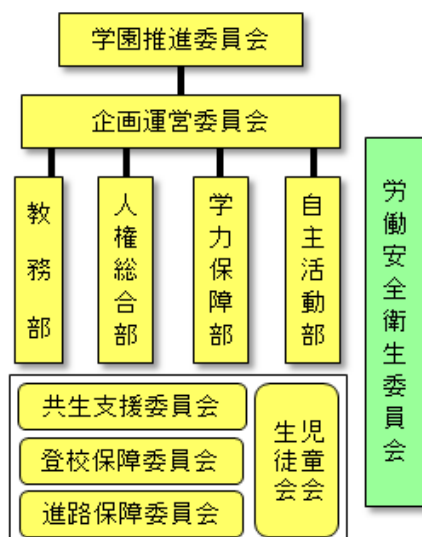
その周りの9つの山（弧）は、義務教育学校の9年間で子どもたちを育むことを意味しています。

学園の体制

教職員組織と児童・生徒について

管理職の体制	・学校長 1 名、副校長 1 名、前期担当教頭 1 名、後期担当教頭 1 名、幼稚園長 1 名
教職員の体制	・教職員は、前期（1～6 年）後期（7～9 年）の児童数、生徒数に応じて配置 H30 年度の教職員数： 前期 20 名 後期 14 名 （※毎年変わります） ・上記に加え、子どもたちの教科指導・生活指導に関わる加配教員を複数配置 ・専任の外国人 ALT（英語指導助手）1 名 ・学校図書館司書 2 名 ・学校事務 2 名 ☆学園生活の様々な場面で、すべての教職員で子どもたちの指導に当たります！
学年のまとめ	I 期（1～4 年）・II 期（5～7 年）・III 期（8～9 年）で、効果的なカリキュラムを構成
学園のクラス構成と園児・児童・生徒数	< H30 年度 > 幼稚園 3～5 才児各 1 クラス、前期・後期とも各学年 1～2 クラス、支援学級 7 クラス 幼稚園 3～5 才児 計 42 名、前期 271 名 後期 133 名 計 404 名

学園組織



部活動



運動部：男子バスケットボール部・女子バレーボール部

陸上部・野球部・女子ソフトテニス部

文化部：吹奏楽部・V S 部

※5年から希望者の参加が可能



学園の教育理念

施設一体型の一貫教育校の特徴を最大限に活かし、学園がめざす子ども像を具現化します

※目的意識を持って自ら学ぶ子ども

教員一人ひとりが学園を担う一員の自覚を持ち、9年間を通して学習意欲を育てます

- ♡ 幼稚園から始まる英語学習・・・専任のネイティブ A L T が学園教員とともに活動します
- ♡ 毎時間の授業を大切にし、子どもに寄り添う指導で主体的・対話的で深い学びを実現
- ♡ 聞く力、説明する力を育成する日々の学習活動
- ♡ 5年からはじめる前期・後期教員による教科担当制でのきめ細かな指導と少人数学習
- ♡ 自学自習力を高める「毎勉ノート」や毎日の朝学・朝読・家読
- ♡ 基礎力を高める「パワーアップ学習」を毎日実施



※心豊かな子ども

9年間の一貫性のある人権教育・生徒指導・支援教育で、子どもたちの豊かな心を育てます

- ♡ いじめを「起こさず・許さず・見抜く」ために、個別面談やアンケート、いじめ撲滅運動を展開
- ♡ 困ったときに相談できるスクールカウンセラー、子どもたち全員の顔と名前がわかる先生方
- ♡ 1年から9年までの成長段階に配慮した、楽しい縦割りの活動（児童・生徒会、委員会活動など）や学校行事
- ♡ 5年から始まる本格的な部活動
- ♡ 学園の充実した図書館を最大限活用した読書活動や図書館教育



※健康でたくましい子ども

9年間を見通した保健・体育指導、食育指導で、健康でたくましい子どもを育てます

- ♡ 9年間を見通した食育・体育・保健指導
- ♡ 後期の専門教員による充実した体育の授業
- ♡ 学校外の専門家や地域の人材を活用した特別授業（キャリア教育や歴史文化にかかわる内容）

※地域で育つ子ども

学校、保護者、地域が一体となって、これからの社会を担う子どもに生きる力を育てます

- ♡ 校区の安全見守り隊、青少年健全育成連絡協議会など、学校を支える団体と強ちに連携
- ♡ 気軽に相談、感じた疑問や意見を直接学校に伝えられる体制
- ♡ 前期・後期が一体となった学園の P T A 活動
- ♡ 学園の全教職員ですべての子どもを見守る安心な体制



学園の9年間の教育の流れ

学校生活全体を通して、生きる力を育成。

I 期（1～4年）

II 期（5～7年）

III 期（8～9年）

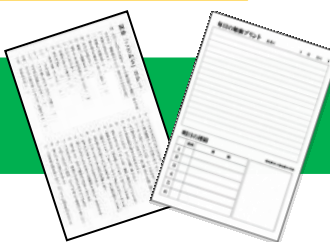
学ぶ力

自ら学び、自分の夢・進路を
実現する力を持つ

基礎基本と家庭学習習慣



基礎基本と自主的な学習



進路を見据えた自主的な学習



一部教科担任制



教科担任制



ALTとの学習 外国語に親しむ



外国語を話す



外国語で伝え合う



道徳

公開授業・研究授業を通して、重点とする価値項目【公正・公平・社会正義】について研究を進める

集団づくり 仲間と仲よく学ぶ



仲間とのかかわりから学ぶ



仲間のおもいに重ねて学ぶ



地域に学ぶ 地域を知る



地域の産業を知る



人にやさしいまちづくりを考える



健康を知る



みんなで取り組む健康な身体づくり



健やかな体づくり



基礎体力向上（1～5年）



専門性を生かした後期課程教員による体育授業（6～9年）

全学年での
運動会を実施

個に応じた心身の成長



つながりを深める部活動（5～9年）



健やかな身体

自ら心身を鍛え、
困難を乗り越える強い心と体を持つ

学園の生活 I

幼稚園との施設一体型の利点と、4-3-2の学年割を活かした一貫教育カリキュラム

★幼稚園と学園の教職員が密接に連携し、12年間の一貫教育を行います。



学習内容が深まる教科担当制の授業



学習事項を確実に身につける補充学習



憧れの上級生と取り組む本格的な部活

確実に理解が深まる少人数指導

すぐれた機能性と多様な個性に配慮した一貫性のある制服

幼稚園から9年までネイティブALTと一緒に学ぶ英語学習

「憧れ」と「思いやり」の心を育む異年齢交流活動



幼稚園
(3～5歳)

- ・「なぜ?」「どうして?」という探究心の芽生え
- ・一人でやってみる力の芽生え
- ・友だちと交わる力の芽生え
- ・健康な身体とやさしい気持ちの芽生え

学ぶ意欲の芽生え
(準備)

I 期
(1年～4年)

- ・「なぜ?」「どうして?」という探究心の高まり
- ・一人でやってみる力の高まり
- ・友だちと交わる力の高まり
- ・健康な身体とやさしい気持ちの高まり

学習の基礎固め
(定着・充実)

II 期
(5年～7年)

- ・物事の原因を解明しようとする意欲の伸長
- ・自分の考えを発信する力の伸長
- ・経験と知識をつなげる力の伸長
- ・体力の向上と思いやりの心の伸長

活用力の充実
(発展)

III 期
(8年～9年)

- ・学習した知識を活用し多面的、論理的に深める力の伸長
- ・社会の仕組みに気づく力の伸長
- ・進路選択に立ち向かう力の伸長
- ・充実した体力と安定した心の伸長

夢の実現
(挑戦・飛躍)

アプローチ

ホップ

ステップ

ジャンプ



富田林市で初となる小中一貫校〈彩和学園〉がスタート！

[通常ページへ戻る](#) 掲載日：2022年5月12日更新

富田林市で初となる小中一貫校〈彩和学園〉がスタート！

富田林市では、市施政方針に基づき、小・中学校9年間を見通して系統的な教育をめざす〈小中一貫教育〉を推進しています。

令和3年度より、小金台小学校・明治池中学校を先進校として位置づけて研究を進めてきました。ついに、令和4年4月、施設分離型の小中一貫校〈彩和学園〉として新たなスタートを切ることができました。



◎みんなで決めた学園名！

この〈彩和学園〉という学園名決定の主役は、小・中学校の子どもたちです。

児童会・生徒会のメンバーによる〈小中サミット〉で、保護者、教職員の小中一貫校への思いを受け取ったメンバーたちは、みんなから集まったたくさんの学園名の候補の中から10点に絞り込みました。それを子どもたち全員の投票によって4つに絞り込み、さらに児童会・生徒会で議論を深めて〈彩和学園〉に決定しました。



◎ これからの取組み

5月10日に学園の全児童生徒が集まって、スタートイベントを行いました。

今年度は、9年間を見通したカリキュラムに基づいて授業を行ったり、中学校の先生が小学校で授業を行ったりすることなどを通じた「確かな学力を育む取組み」や、学園ならではの総合的な学習の時間を再編成した教科「未来科」の取組みなどを進めていきます。



◎ 富田林市各中学校区の小中連携

 [富田林市各中学校区の小中連携リーフレット \[PDFファイル/1.85MB\]](#)

このページに関するお問い合わせ先

教育指導室

富田林市の 小中一貫教育

小・中学校が、めざす子ども像(こんな子どもに育ってほしいという学校の願い)を共有して9年間を見通したカリキュラムを編成し、系統的な教育をめざすのが小中一貫教育です。

本市教育委員会では市施政方針に基づき、小中一貫教育を実現するための研究・実践を進めています。

なぜ今、小中一貫教育なの？

本市ではこれまで、小・中学校の教職員の情報交換や交流を通じて、小学校から中学校への滑らかな接続をめざし、子どもたちへのきめ細かな支援を図ってきました。

小学校と中学校の間には、教育内容や教員の指導方法の段差が生まれがちです。また、子どもたちの心の内面が大きく変化する時期に重なります。

「中1ギャップ」とも呼ばれる、この学習や生活上の段差を軽減し、確かな学力をはじめ、これからの時代に求められる資質・能力を育成することをめざして、市内すべての学校において小中一貫教育の研究・実践に取り組んでいます。

どんな取組みを進めているの？

令和3年度より、小金台小学校・明治池中学校をパイロット校と位置づけて、次のような取組みを先導的に進めています。

まず、小・中学校でめざす子ども像を共有しました。そして、9年間で育てたい力を明らかにしてカリキュラムをつくっています

子どもたちの学習のつますきを小・中学校の教職員で共有し、指導の改善に活かしています

小1から中3まで一貫して取り組む「未来科」を創設しました

小学校高学年から教科担任制を取り入れて、より専門的でわかりやすい授業をめざしています

小・中学校で生徒指導の考え方を共有し、新しい学校生活ルールづくりを進めます

障がい理解や支援観の共有により、支援教育を充実します

より系統的な教育を実現するため、4・3・2制の研究を進めています

このような取組みを通じて、

- ▶ 確かな学力の育成
- ▶ 多様で幅広い人間関係の中で、責任感や自己有用感の育成
- ▶ 安全で安心な進学による不登校の減少

など、未来を生き抜く力の育成をめざしています

今後、市内全中学校区で小中一貫教育の取組みを進めていきます！

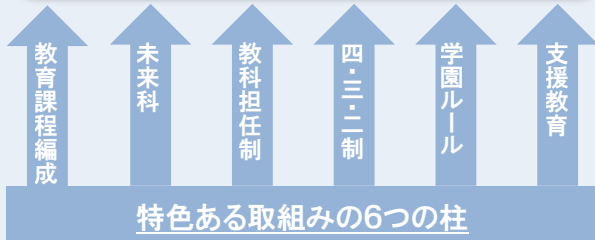
明治池中学校区の取組み



小金台小学校と明治池中学校の小中一貫教育では、こんなことをめざしています

9年間を見通した教育ビジョン

めざす子ども像
〈今と未来、社会で生きる自分らしさを〉
 ～挑戦～ ～継続～ ～共生～



- これから時代求められる資質・能力を育む教育の実践
 未来科を中心としたキャリア教育の実践
 自尊感情の醸成と自己有用感の育成をめざした教育の実践

期待する5つの成果

小・中の
指導方法の
段差解消

連続性・
系統性を確
保した学び

子ども一人
一人の自分
らしさの確立

発達段階に
応じた指導
体制の構築

小・中学校
教員の指導
力向上



子どもたちにとってより良い小中一貫教育へ

- ▶ 段差のない連続した学びによる学力向上
- ▶ 中1ギャップの軽減と不登校の未然防止
- ▶ 未来に希望を持ち、主体的に社会を生き抜いていく力の育成
- ▶ 人権・支援教育を通じて、誰もが安心して学べる環境づくり



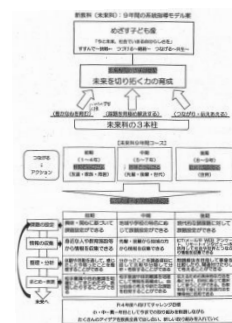
令和3年度に小中一貫校開校に向けて取り組んだことを紹介します！

1 1年生から9年生まで、系統的に育てていく「つきたい力」を明らかにしました

9年間の構造図		前期 (小1～小4)	中期 (小5～中1)	後期 (中2～中3)
とりいれる力	きく			
よむ				
カタチにする力	みとおす	わくわく	じっくり	ひろく
	えらぶ			
	くみだてる	わかる	なぜを	ぶかく
	しあげる			
つたえあう力	はなす	できる	つかむ	えがく
	かく			
今を生きる力	みつめる			
	つなげる			



2 「生き方」を追究する新しいカリキュラム、〈未来科〉の創造に取り組んでいます



3 「めざす子ども像」を実現するため、9年間のカリキュラムを作成しました

- ▶ 小・中学校の教職員全員が主要な5つのタスクに分かれ、タスク会議において検討し、作成しています

①教務

学園会議体制の検討。学園年間計画作成など

②学力向上

学力向上グランドデザイン作成。研修計画作成など

③未来科

④生徒指導

基本方針・目標の検討。

学園ルールの作成など

⑤児童生徒会



4 児童生徒会の取組み 小中サミット〈学園名決定に向けて〉

- ▶ 児童会・生徒会が中心となり、保護者、教職員の小中一貫校への思いを受け、子どもたちの主体的な活動を通して学園名を考えました



各中学校区の取組み

第一中学校区



20歳の子どもの姿を想像して

- 一中校区の幼小中の5校間で、〈12ヵ年プロジェクト〉を進めています。各校園の人権担当で毎月交流し、交流会や総会を計画しています。また、部ごとに年数回の活動を実施し、成果を冊子にまとめ配付しています。今年度は卒業生の保護者から、保護者としての思いや部落問題についてお話をいただきました。

また、年2回実施したグループ交流では、「今の子どもたちに12ヵ年を通して将来どんな姿になってほしいのか、どんな力をつけたいのか」「前回の交流を通して、2学期に子どもとどんな関わりができたのか、意識したのか」について交流しました。校区の子どもの20歳の姿を想像して、幼稚園の段階から共通の思いで関わっていると実感できました。



第二中学校区



ICTを活用して情報共有

- オンライン上のファイル保管サービス〈Googleドライブ〉を活用して、小・中学校の間での情報共有を進めています。たとえば、スクールカウンセリングの予約や確認は、これまでは中学校を窓口として電話で受け付けていました。〈Googleドライブ〉を利用することで、校区内の各小学校から直接予約でき、速やかに情報共有ができるようになりました。
- 校区の小・中学校で生徒指導の交流会を月1回行い、協働して児童生徒への早期支援を図っています。小・中学校の教職員が共同で家庭訪問を行うなど、個に応じた効果的な対応を行っています。

月日	1. 11:50~12:40(4時登校)	2. 13:00~13:20(登校)	3. 13:30~14:10
9/30(木)			
10/7(木)	二		
10/21(木)			
10/28(木)			
11/4(木)	小		
11/11(木)		二	
※45分授業 11/18(木)	(11:35~12:20)		(13:25~14:10)
12/2(木)	小		
12/9(木)			
12/16(木)			
12/23(木)			

第三中学校区



ICTで交流推進

- 三中校区ではICT教育推進のため何ができるかを考え、まずは教員による知識理解を深めることから始めました。そして、児童生徒による活用をめざして以下の取組みを進めています。
 - オンラインで情報を共有できるフォルダを作成し、小・中学校が情報交換できるシステムを構築しました。中学校の校則などを共有し、小・中学校がかんたんに確認できる環境が整いました。
 - 入学前に、ICT機器を活用して入学説明会で体験授業を行ったり、中学校の教員が出前授業を行って中学校の一日を紹介したりして、中1ギャップの改善に努めています。



金剛中学校区



中学生があこがれのモデルに

- リモートで小・中学生をつなぐことができないかと考えて、中学生が英語で「誰でしょう？」クイズを出題し、小学生が答えるという授業を行いました。
 - 出題者の中学生がクイズ上の人物になり切り、小学生は既習表現を使って質問をしました。発表者以外にも発言や質問ができるように工夫しました。
 - 昨年まで小学校にいた先輩がより英語が使えるようになってのを見て、小学生は「中学生になったら、同じことをしたい!」「中学生みたいに話せるようになりたい!」と、英語や中学校への期待感が高まりました。中学生も意欲的に英語で話そうと取り組みました。



各中学校区の主な取り組み

葛城中学校区



校区の「育てたい子ども像」を共有する

- 葛城中校区で共有する「育てたい子ども像」を見出すために、校区内の学校園の教職員の意識を把握するアンケートを行い、共有しました。互いの考えを知ることができ、校区の「育てたい子ども像」を見出すためのきっかけとなりました。
- 小・中学校で協働する学力向上の取り組みとして、中学校の定期テストの時期に合わせて小学校でも自主学習などに積極的に取り組む〈家庭学習ウィーク〉を設定しています。また、小・中学生の〈自主学習ノート〉を互いの校内に掲示し合っています。取り組みを継続することで、子どもたちの学習意欲の向上につながっています。



喜志中学校区



校門でのあいさつ運動を ―小中教職員の相互乗り入れ―

- 喜志中校区は、2つの小学校から中学校区が分かれることなく進学できる環境にあります。

登校時の校門での〈あいさつ運動〉は、自己肯定感や自己有用感を高める取り組みの一つです。小・中学校の教職員がこの〈あいさつ運動〉に相互に乗り入れることで、校区全体で子どもを見守りながら、子どもの9年間の成長を教職員同士が共有できる土壌づくりを始めました。誰が行っても違和感がないようにすること、それが一番の目的です。

小学生が中学校の先生を知ること、中一ギャップ解消への効果が期待できます。また、中学生も小学校の先生に会えることを喜んでいます。



藤陽中学校区



守ろう授業の三か条

- 藤陽中校区では、小学生が中学校へ、中学生が小学校へ行って行う〈小中合同あいさつ運動〉に取り組んでいましたが、さらに3校で共通して取り組める内容を考えました。

小・中学校の授業規律の統一をめざして教職員同士で話し合い、3つの合い言葉を決めました。

守ろう授業の三か条

- 一、時間通りにスタート（授業準備してから休み時間）
- 二、あいさつをきっちりする（イスはしっかりと中に入れる）
- 三、提出物は期限内にしっかりと出す

取り組みを進める中で、良い習慣が確実に身につけてきています。



今後の方向について

- 令和4年4月を目途として、小金台小学校・明治池中学校を小中一貫校(施設分離型)のモデル校として設定し、令和3年度中に検討したカリキュラム等の実践に取り組みます。また、研究実践による成果や課題について、市内教職員を対象に報告を行う予定です。
- 明治池中学校区以外の校区において、同校区の取り組みを活かして小中一貫教育の取り組みを推進していきます。

富田林市の小中一貫教育 リーフレット



富田林市教育委員会事務局教育指導室

〒584 8511 大阪府富田林市常盤町 1-1

TEL 0721-25-1000(代表) FAX 0721-26-2300

令和4年3月 発行